『教育研究』39 (1997) pp.1−31
Educational Studies, 39 (1997) pp. 1−31
International Christian University

愛着システムの5国間比較文化的研究

藤永　保

1　序

近年の発達研究において、最も注目を引く研究分野の一つとして「愛着」をあげることには、おそらく誰も異論はあるまい。愛着の原語はattachmentであり、密着した関係の意味であろうが、これが人間関係に転用されると緊密な愛情関係を意味することとなる。ただし、その関係は必ずしも相互的とは限らない。発達心理学の分野では、この語は好んで母子関係を表現するのに使われているが、このような深層的・基本的な関係においても愛着が一方的である例は、長谷川伸の名作『瞼の母』にも描かれている。このような（相互的または一方的な）緊密な対人関係の成立を愛着と呼ぶ。

愛着研究という一見新しい潮流の源は、やはりフロイトにさかのぼる。尤も、フロイト自身は周知のように、ユダヤの伝統をなす家父長制的家族のあり方を永久不変と信じていたようであり、その学説の中には母子関係は顕在的にはでてこない。5歳頃の前性器期が幼児期発達のクライマックスをなし、ここで初めてエディプス・コンプレックスが成り立つというフロイトの観念は、父子関係を一方的に強調し母子関係をその陰に隠している。しかし、よく考えてみれば、子・父・母の三角関係はどの一項を欠いても成り立たないことは明らかである。フロイトのいう早期の発達期、口唇期や肛門期における極度の欲求不満がこれらの時期への固着を導き、後の口唇・肛門性格など

の好ましくない特性を準備するという説は、口唇期や肛門期のしつけが主として母親の役割であった時代においては、母子関係のなかで作られると考えねばならない。これまた、明らかに母親を主力とする影響ー母子関係の重要さを示唆している（フロイト，1969)。しかし、男性優位時代のフロイト説では、母子関係は表に現れることはなかった。

母子関係が表だって取りあげられるようになるのは、フロイトの娘アンナ・フロイトが児童分析を始めたイギリスの風土におけるものだったことは興味深い。ここでは、対象関係論と名づけられる新しい精神分析学がうまれた（小此木，1979)。

対象関係論にはさまざまな主張があり一口にまとめるのは難しいが、フロイトよりもより早い時期の発達を重視すること、自我の機能は外的対象との緊密な関係の構築にあること、この対象として最も重要なものは母親であること、母親と乳児との間の暖かい養育と相互交流の関係が発達の鍵を握ることなどがほぼ共通した主張とみられよう（ここでいう母親は、現代の先進国においてはさまざまな養育形態が生まれつつある点から、むしろ養育者とおきかえるほうが正当であろう。しかし、養育者ー子ども関係という用語は煩雑であるため、余り使われていない。以下、慣用の母子関係で代表させておく)。

イギリス学派には属さないが、スイス生まれでアメリカで活躍した小児精神医スピッツ（1965）のホスピタリズムについての業績は、対象関係論の意義を示すものとして分かり易い。ホスピタリズム（施設病）とは、乳児院・孤児院などに収容された子どもの早期死亡率がきわめて高いことが今世紀初頭にアメリカ・ヨーロッパで期せずしてほぼ同時期に発見され問題となったことに由来する（金子，1994)。対策として、さまざまな予防衛生策がとられたが、はかばかしい効果を上げなかった。スピッツは、最新の医学設備を備えた孤児院・普通の家庭児・非行少女のための母子更正寮の３カ所で育つ子ども約100人ずつを数年間にわたり追跡した。常識的には、前二者の子どもは健全に成長するのに対し、物質的・精神的に劣ると考えられる後者が施

設病の被害を受けると予想されるであろう、予期に反し、後者の子どもは家庭児と同様にすくすくと成長した。一方、医学的に整った乳児院児は２歳までに91人中34人が死亡し、残った子どもも実際の年齢のやっと半ばに達するか否かのひどい発達遅滞症状を示した。母子更正寮の優位は、乳児院では看護婦１人が10人の子どもをみていたのに対して母親１人が平均して２人の子どもを育てていたというところにしかなかった。これは、きわめて明確に養育関係の欠如が施設病の真因であることを立証している。

スピッツは、次のように述べている。「生後１カ年の間、母親は（子どもにとって）すべての動作、すべての認識の媒介者としての役目を持つという人間的な仲間である」（古賀行義訳）。この言明は，対象関係論のきわめて分かりやすい説明になっている。以後，施設が原因という誤解を招きやすい施設病という名称は捨てられ，代ってマターナル・デプリヴェーション（maternal deprivation, 母性的養育の欠如）という名称がとられるに至った。

しかし、マターナル・デプリヴェーションの名称そのものは、イギリスの小児精神医ボウルビイの提唱にかかるところが大きい。彼は、世界保健機構の依頼によって各国の施設病の実状を調査し、1950年に周知の“Maternal Care and Mental Health”を著し、母性的養育の緊要性を世界に訴えた。上記著書の一般向けの解説書序文に、ボウルビイは伝統的西欧家族制度の近年の変質を憂える余りこの本を書いた旨を述べているが、当時の彼の問題意識ををよく示すというべきであろう。そのため、彼は乳児がただ一人の養育者（つまりは、母親）に強い愛着を持つことを強調してフェミニストの反発を買うに至るが、それは後の話になる。そのボウルビイが愛着の意義を強調するのは、当然すぎるほどのことであり、近年の愛着研究の盛行はここから開かれたといってよい（Bowlby, 1951）。ただし、フロイトが固着のような用語によって、強い愛着の含む一種のアンビヴァレンスについての警告を――強すぎる愛情（甘やかし）は、子どもの欲求を最大限に充足しようとする養育を導き、それは逆に僅かな欲求不満をも誇張させやすいと考えられるので――発していたのに対して、ボウルビイ以降は愛着の持つネガティヴな側面

についての警戒が薄くなったことは否めない。彼の問題意識は、フロイトとはむしろ異質の社会的基盤から発していたことをみるべきであろう。

近年の発達研究は、愛着に対してほぼ無条件のプラスの価値附与を行うのが通例と述べたが、それらのなかでも最も目覚ましいのはエインズワース学派によるストレインジ・シチュエーション(strange situation)の研究であろう（Ainsworth, etal. 1978)。エインズワースは初め母子関係についての比較文化的研究を自然観察的方法によって行っていたが、やがて標準化された実験的観察手法の必要性を感じたようであり、上の方法を案出した。これは、乳幼児を実験室内で母親から引きはなし、また見知らぬ人に接触させるなど一定方式でのストレスを与え、その前後の乳幼児の行動や母親への態度などを決められたコードに従って記録しようとするものであり、現在最もよく使われる方法の一つとなっている。

2　日韓文化比較への研究意図

エインズワースらのストレンジ・シチュエーション法では、結果をおおまかにA,B,Cの三つのタイプに分けて表示する（現在では、それ以外のタイプやさまざまな亜型が考えられているが、ここではふれない)。A型はいわゆる回避型であり、母親が出ていっても格別悲しむこともなく、再会にあたっても喜びを示さない。B型は安定型と呼ばれ、母親がいれば見知らぬ人に対しても親しくふるまうことができ、また分離後の母親との再会に強い喜びをみせる。C型は抵抗または両極型であり、母親との分離にあたって激しい悲しみを示すが、再会してもすぐに宥めることはできずカンシャクなどの抵抗を示す（久保田，1995)。

このうち、最も望ましいとされるのはB型であることは容易に推定できよう。エインズワースらは、さまざまな研究によって、B型の持つ情動的安定性は青年期にもなお持続し、またB型は自信や意欲も高いという。一口にいって、乳幼児期からの母子間の愛着こそ望ましいパーソナリティを育てる鍵

ということになる。

ところで、ストレンジ・シチュエーション法を用いて日本と西欧諸国との間に比較研究が行われるようになると、そこに興味深い結果が見いだされるようになった。それは、日本ではB型が圧倒的に多く、一方C型は少数でA型は皆無に近いことである。これに対し、アメリカ、スウェーデン、イスラエルなどでもB型は相対的には多いけれども、A型もまたC型をむしろ上まわる比率を示す。西独に至っては、B，C型よりもA型の比率が高い有様となる（小野，1992)。これは、一体何を表しているのであろうか。

むろん、限られたサンプルからの結果であるから上を確定的とすることはできない。しかし、それにしても全くの偶然とすることも難しい。ドイツのある研究者は、ドイツでは昔から子どもと距離をおくという母子関係が伝統をなし、それがこのような結果をもたらしたのかもしれないという感想をのべている。そうであれば、これらの相違はむしろ文化的なものと考えるのが正しいかもしれない。

この点ですぐに思い当たるのは、日本伝統の子宝思想であろう。山上憶良は、1200年以上も前に周知の「銀も金も玉も何せんに　勝れる宝子に及かめやも」という歌を詠んだ。「憶良らは今はまからん子泣くらん　そを負ふ母も吾を待つらんそ」も、家族愛を謳った詩句として名高い。

しかし、憶良は朝鮮半島からの帰化人の子息だったといわれている。この事情は、日本人のもつ儒教的感覚や観念が朝鮮半島を経由して伝えられたであろうことを暗示している。むろん、ここでいう儒教とはすぐ連想されるような孔子・孟子によって体系化された倫理思想を指すのではない。体系化された儒教のいわば基底にあって、それを支えている目に見えない民間信仰の広がり、加地（1995）のいう「沈黙の宗教」を指す。

この意味での儒教は、宗教学者のいう原始信仰の一種ともいえよう。原始といったことばの含意する暗黙の価値付けを筆者は好まないが、先祖崇拝のような信仰は多くの未開発地域に見られる特色であるのは事実であろう。その意味からすれば、ここでいう儒教は必ずしも中国だけのものではなく、広

くみれば東アジア一帯の民衆に共有される民間信仰であったように思われる。おそらく、それは永い中国文化の伝統のなかで次第に意識化されて洗練の度を加え、社会化と儀式化を経てついに孔子・孟子にみるような倫理思想の域にまで昇華するに至ったのではあるまいか。以上は筆者の勝手な解釈に過ぎないが、そうであるなら儒教的感覚や観念が、体系化された儒教思想の知識階級への輸入とは別個に、民衆のなかに易々と受け入れられた理由がよくわかるように思われるのである。

その意味での儒教的信念の核心とは何か。加地によれば、家系の維持と伝承だという。近年の社会生物学も、生物の個体は単に利己的遺伝子の乗り物に過ぎず、遺伝子の目的は自己と同質の遺伝子をできるだけたくさん増殖し維持することにあると主張する。両者の信念は、共通しているといえなくもない。ただし、大きな相違点は、儒教の教義では男子だけが家系を伝えられるとするところである（ここから、必然的に男尊女卑の傾向が生まれるために儒教は現代では時代遅れとみなされ、我々自身もその信念の分有に気づかずにいるのは注意を要する点であろう）。したがって、家族・血族・宗族の間の融和と結合が何より大切ということになろう。

この中心教義からさまざまな徳目が派生してくるのは、見やすい道理である。子どもは家系存続の鍵を握るから、子宝思想は当然のものとなる。儒教では、「孝」が最大の美徳とされるのもこれまた当然といえよう。忠は、宗族の長老、転じて上位者または権力者に対して親のいわば代理者として同様に仕えるということにほかならない。個々人のアイデンティティや誇りは、特定の家系の一員であるという感覚によって支えられている。家族は、単に人間的欲求を充足するための社会的制度として機能するのではなく、すべての徳目を創り出す母型として働き、その意味でまた子どもの社会化の鋳型ともなっている。

公式の儒教思想の伝来は6世紀とされているが、ここに画いたようなむしろ習俗としての儒教の伝来ははるかに早かったと筆者は考えたい。百歩を譲って、子宝思想や観念の起源は未知としても、それが一つの文化的伝統とな

って継承されてきたことは疑いを入れない。16世紀に日本に渡来した宣教師たち、たとえばフロイスなども等しく日本の子育ての方式がきわめて温和であるがままの教化に頼り懲罰を加えないことに感嘆している(山住・中江, 1971)。これに対し、アリエス（1980）が、西欧世界では子どもの存在が公式に認められるようになったのはようやく19世紀も終わりに近づいてからだと説くとき、その相違に驚かされるのである。

すると、先にみた日本におけるB型の圧倒的優位は、必ずしも日本だけの特色とはいえず、おなじ儒教的伝統を保持する韓国や中国でも同様であることが期待されよう。かって、土居健郎（1971）は「甘え」は日本語に特有なことばであり、したがって日本的心性を典型的に示すものと説いた。これに対し、韓国の李御寧（1982）は、甘えに関する語彙は韓国語のほうがはるかに豊富であり、土居の論議は日本と西欧諸国との一方的比較に過ぎないという痛烈な指摘を行い、土居も後にこれを承認した。日本にのみB型が多いとするのも、同様な一方的比較の所産に過ぎないかもしれない。この問題を解くには、儒教文化を共有する東アジア諸国、なかでも儒教文化の先駆者であり、また歴史的・文化的に深い相互交流を持つ韓国から始めるのが最もふさわしい、これが我々の日韓比較研究を思い立つ基本的動機であった。

3　愛着システム

以上のように、日韓比較研究の主眼は、ストレンジ・シチュエーション法による母子関係の実験的観察にあるが、その他に、実験資料のもつ意味をより明らかにし的確な解釈を下すためにいくつかの補助実験と調査とを行った。筆者は、そのうち以下の愛着システムの部分を担当した。

ここにいう愛着システムとは、ハーロウの研究にヒントを得て、筆者の作り出した造語である。ハーロウ（1978）は、マカクの仲間関係について実証的資料をあげたのち、次のようにいう。「他者への愛情は、五つの基本的な系によって記述することができる。各系は、次にくる系に必要なものの基

礎を与える。最初にくる愛情系は、母性愛、つまり子に対する母の愛情である。第二は、子の愛情、つまり母に対する子の愛情である。このあとには、同年齢の仲間どうしの愛情がくる。この愛情は、正常な異性愛の発達の基礎となる。第五の愛情系は、父性愛、つまり家族や社会集団に対する成熟男性の愛情である。」（浜田寿美男訳）

これら五つの系は階層的構造を持ち、「発達の他の領域と同様、愛情の発達においても、ひとつの系は次に続く系の準備になり、またこの系が次の系の準備になると言うように進行する。それ故、ある系が正常に発達しなければ、次に続くべきより複雑な愛情のための適切な基盤がつくれない。」とされている。この構想は、エリクソンなどとも共通する後成説の原則にたち、きわめて興味深いものだが、多少の異論がないでもない。

例えば、彼が第五にあげている父性愛は、マカクの場合にはどうであろうか。マカクでは父系の相互認知は報告されていないようであり、実際、父系での近親交配は頻繁に起こっているものと思われる。ここで、父性愛といった言葉を使うと、マカクにも父系についての相互認知が成立しているかのごとき誤解を与えかねない。むろん、ハーロウはその点は心得ていて、「父性愛とは（この場合）、家族や社会集団にたいする成熟した男性の愛情であり、主に防御的機能を果たすものとして表れる」、と述べている。ローレンツのような言い方をすれば、この愛情系は一種の養育本能の現れといえるであろうし、現在流行の社会生物学風に言えば、利己的遺伝子が自らと同質の遺伝子を残そうとする企てにすぎないとみなすこともできる。マカクでは、母系の血縁関係は相互によく認知されていて、兄弟姉妹、叔父・伯母などが他者から攻撃を受けると、応援のためにかけ集まってくるといわれる。父系については、このような認知はありえない。すると、マカクの場合は、母性愛及び子の愛情の系として母系の血縁愛といったものも考える必要があろう。しかし、父系（そもそも、そのような概念が成立しないといったほうがよいのだろうが）では、それはあり得ない（ここには、既に人間の持つ文化規定性が介入している）。人の父性愛も利己的遺伝子の所産とするならマカクと同

質という意見もあろうが、前者では人類の子ども一般どころか、血縁のそれですらなく、まさに自己自身の子どもでなければならないところが、大きく異なっている。

ハーロウは、このシステムが人間にも同様に適用できると考えているようであり、所々に具体例をあげてみせている。人間も霊長類の一つであり、基本的にはマカクと類比できることは筆者も否定しない。しかし、上にその一端をみたように、人間ではやはりその文化規定性の大きさはこれまた否定しようもない。ハーロウは、「母性的能力の主要因は、生得的で、遺伝的に決定された変数、つまり女に生まれるということである。」とのべている。この言明は、現在なら直ちに多くの批判と反論を招くであろう。それを、単に時代の変遷ということはできない。人間は、生得的なものを文化的に洗練し、さまざまに発展させることによって独特な態度・慣習・制度などを築いてきた。母性も、当然生得的基盤は含みながらも、いくつかの方向に展開し時として現象的には相異なるものにさえなる（ハーロウは、マカクでも種族的差異はあるというかもしれない。しかし、次に述べる性的虐待のようなものまでサルの類にみることができるであろうか）。エリクソン（1980）は、「しつけというしきたりによって母親たちの手にゆだねられた目標や価値――は、集団独特の文化的慣習がそれらを「自然である」と考えつづけ、代わるものを認めないために存続する。――そのような価値は個人の同一性の意識……の本質的な部分となっているからこそ存続するのである。そしてこの目的のためにはそれらの価値が先祖代々、早期のしつけの中にしっかりと定着しつづけていなければならないことを私は主張する。一方、しつけの一貫性を維持するためには、それが経済と文化の連続的な統合体のなかに深く組み込まれていなくてはならない。」（仁科弥生訳）とのべている。母性愛も、このような意味で「自然」だと考えられているのであり、単純に生得的ということはできない。

ここから、第二の疑問が浮かんでくる。人にあっては、生物としての普遍的要素と並んで文化的次元の介入を考えねばならない、という問題である。

いいかえると、どの文化においても人間間の愛情の様相にはほぼ変わらない面が認められると同時に、ある文化に固有の形で結晶化された次元があるものと思われる。例えば、日本では、よく「夫婦は一世、親子は二世」という。この表現は、いうまでもなく、血族の存続を重視する儒教思想からもたらされたものである。顕教としての儒教思想はもはや我々のまわりには認められなくなってはいるが、密教的部分はいぜんとして残っていることは否定しがたい。近年、日本では老年離婚が急増している。子どもの小さいうちは、我が子のため全てを我慢していたのが、やっと成人して多年の不満が一度に噴き出すというのが原因といわれる。これは、上の観念が未だに生きていることを示す。西欧的伝統では、独立した二人の男女がであうことが家族の始まりであるから、夫妻の結合の方が一時的であり、親子のそれはより弱いのが当然である。すると、愛情の系の優位性の序列は文化によって逆転する可能性がある。

一方、近年西欧社会では、幼児の性的虐待がしきりに問題とされている（たとえば、テア，1995）。事件の多くは、実の父親が娘に対し性的悪戯を仕掛けるものだといわれる。フロイトの初期のヒステリー理論は、幼児が早すぎる性的誘惑を受けることが病因とするものであった。しかし、フロイトは後にこの臨床的観察は事実と異なることを知り、初期理論を放棄したといわれる。けれども、少なくとも、患者の告白の一部は真実であるとする意見が後を絶たない（たとえば、Leonard，1984）。すると、こうした事例は昔から周知の事実であったようにも思われる。日本にも、むろん、このような例は絶無ではない（北山，1994）。しかし、アメリカでは年間百万件にも及ぶ発生件数があると伝えられているのとは、とても比較にはならないように思われる。このような様相は、子宝思想の根強い東アジア文化圏では、きわめて理解しにくいものであり、位置づけにとまどうところである。子宝思想のもとでは、子どもへの愛情と異性へのそれとは明らかに別物である。しかし、フロイト思想に象徴されるように、全ての愛情は性的なものから生じるという一元論も可能ではあろう。この相違も、文化的なものを含んでいるように思

われる。

以上をまとめると、人の愛情にあっては、ハーロウのいうような明確かつ一次元的序列化は難しく、より複雑な多次元かつ複数の序列化が必要となるように感じられる。この考えが妥当か否かはまだ未定の域にあるが、母子関係の実験的観察に当たっても必要なバックグラウンドをなすことは確かであろう。たとえば、韓国は日本よりは儒教的伝統をはるかに色濃く残し、男系の長子相続の原則はかなり厳密に守られている。このような文化にあっては、母―息子関係と母―娘関係とは違ってくる可能性がある。実際、韓国でもソウルのような大都市圏では核家族化と少子化が急速に進行し、その結果男子が生まれるとそこで出産を止める例が少なくないときく。そのため、一部の学級では男子生徒の数が女子を大幅に上廻り、「やもめ学級」と呼ばれているといった話もきく。母子関係を観察するときも、このような事情は充分心にとめておく必要がある。このことが、筆者に本研究を思い立たせる動機になった。

第三のハーロウへの異議は、やはり人にあっては、愛情は無条件にプラスの価値とは限らないという点である、フロイトは、すでに早くアンビバレンスという用語によって愛情の持つプラス・マイナス両面の働きを表した（藤永，1995）。このことを考えると、人の場合、愛情という語よりも愛着のほうがふさわしい。かつまた、上に述べた人における愛着の複雑な様相と相互関連を考えると、単にいくつかの系の集りというよりそれらの全体性を強調して人間の愛着システム（human attachment systems）と名ずけておいたほうが、これまたふさわしいように思われる（Fujinaga etal, 1996）。 以下、このような意味に用いる。

4　調査

（1）　質問紙の構成

上に述べたように、愛着システムの構造にはかなり複雑なものがあると思われるが、既存の資料はみあたらない。原理的には、様々な人間関係における愛情の相対的強さを漏れなく比較できればよいはずである。試案として、次のような諸関係について考えてみた。親子相互間（細かくいえば、cross-sexualな関係をも考慮して母―息子、父―娘についても質問する）、夫婦、家族、親族（先祖をも含む。これは、儒教文化圏の事情を考慮してのうえであるのはいうまでもない。）、異性、友人―仲間関係である。

一つ一つの項目については、藤永（1996）を参照してほしい。例をあげれば、「2　自分の親にはできるだけ長生きしてほしい」は、いうまでもなく子の親に対する愛着をみようとする。これに対し、「28　自分の子どもにはできるだけ長生きしてほしい」はちょうどこの対になっている。回答の比較から、どちらの愛着がより強いか測れるはずである。

「3　夫婦の年齢がちがいすぎると幸福な結婚生活は望めない」は、間接的に夫婦愛と異性愛との強度比較の質問として作ったものである。「20　父の娘に対する愛情は息子に対する愛情よりはるかに強い」は、「35　母の息子に対する愛情は娘に対する愛情よりはるかに強い」と対をなしている。「19　夫婦間の愛情と親子間の愛情とはその性質が全く異なっている」は、前述したように、西欧的家族と東アジア的家族との違いの一端をみようと試みた。

これらの各問について、自分の意見に近いか否かを、1よく当てはまる、2少し当てはまる、3余り当てはまらない、4ほとんど当てはまらない、の4段階の回答尺度の何れかに答えてもらった。どちらでもない、という中立の回答肢は、事実上の回答拒否をさけるために置かなかった。

質問は、当初31問を作り、試験的に実施を繰り返し、そのつど院生の協

力者と討議して表現、用語などの改訂、設問の削除と補充を行い、最終的に38問とした。その他に定法に従い、５問ごとに、いわゆるダミーまたは関連の質問をおいている。「１　人間関係のあり方は今も昔もほとんど変わりがない」、「６　人間だけが自由な意志を持つことができる」などは、その例であり、人間関係の愛情とは別次元でもさまざまな関連の予想される設問からなる。表題もまた、「人間性についての考え方調査」という漠然たるものにしておいた。

この他、フェースシート項目として、年齢、性別、居住地域（大都市、中都市、小都市、その他の別）、配偶者の有無（未婚、初婚、離婚、再婚、死別の別）、子どもの有無（実子、義子、養子の別、人数、性別）を訊ねた。

（２）　質問紙の翻訳

大きな問題は、常につきまとう設問の翻訳である。本質問紙については、韓国語、中国語、英語と日本語のそれぞれに通じている留学生あるいは帰国学生に第一次の翻訳を依頼し、それをさらに別の両国語に堪能な学生に点検してもらい再修正するという方法をとった。いわゆるバックトランスレーションは行わなかった。バックトランスレーションは、結局戻した翻訳の正誤についての基準を必要とし、際限がなくなることを懸念したからである。韓国語については、共同研究者が日本語にも堪能であったので、二次翻訳後さらに共同討議の機会にもう一度修正してもらった。英語については、native speaker の修正を求め、できるだけ円滑な表現になるよう努めた。

（３）　調査方法

被調査者は、韓国、中国、アメリカ、イギリス、日本各国の幼児を持つ父親・母親と男女大学生とした。なるべく広い層から撰びたいのはやまやまであるが、労力・費用の点から最少限にきり詰めざるを得なかった。実験的観察の被験者についても間接的情報を得ることが望ましいので、特に韓国ではこれと重なるように被験者を選定した。質問紙の性質上、子どもを持つ親が

望ましいが、上の事情と重ねると、幼稚園児を持つ親ということになる。大学生は、調査しやすいという利点から撰んだに止まる。幼児を持つ父母については、それぞれの国の幼稚園ないしそれに準ずる施設の父母に依頼した。地域は、日本では東京、大阪の大都市圏を主としたため他の諸国もこれに倣い、韓国はソウル、中国は上海とした。しかし、アメリカ、イギリスでは協力者の都合によりそれぞれミシガン大學、エヂンバラ大學所在の学園都市であるAnn Arbor, Edinburghとなった。人数は、各群最小100人を目標とした。しかし、イギリスでは幼稚園の規模が小さく父母の調査は予算の範囲内では無理であったため、親の資料はえられていない。

なお、このほかに沖縄県那覇市においても調査を行った。私事になるが、筆者は沖縄本土復帰の前後にかけて社会学・心理学合同の調査チームに加わり、沖縄に渡った。復帰意識及び先島にテレビが導入されるのに伴う地域や児童生活の変化の解明をめざしたものであったが、その過程を通じて沖縄の文化にはやはり独自な色彩の強いことを知らされた。その独自性は、愛着システムの面でもおそらく色濃く表れると考えられる。広い意味では同じ儒教的文化圏に属していても、日本と韓国には差があるように、本土と沖縄との間にも差があるかもしれない。「守礼之邦」は、なお沖縄の一つの標語となっているが、このことは沖縄が儒教文化を直接中国から受容したことを物語る。歴史的事情としては、沖縄の儒教文化は本土のそれよりも韓国に似ている。沖縄学生の反応は本土の学生、韓国の学生のいずれに似ているかは、文化のもつ規定力をみる上できわめて重要な問題点を提供することとなろう。

この調査を進めるにつれて、国際比較のみならず地域文化の違いにももっと眼を向ける必要があることを感じさせられたので、上のような問題意識のもとに沖縄調査を行った。被調査者は、琉球大学の県内出身学生にお願いした。

被調査者の構成については、表を参照されたい。

表　被験者の構成

	両親		大学生	
	父親	母親	男子	女子
日本	91	113	191	230
日本（沖縄）			100	101
韓国	127	166	521	392
中国	122	121	115	114
アメリカ	100	113	100	100
イギリス			102	100

（表中の数字は人数）

3　調査結果

集計は、回答をまず次のように数量化した。肯定度の最も高い１の回答を５点、２を４点、３点に当たるはずの中立の肢をもうけなかったので次の３の回答を２点、４を１点とした。従って、回答の平均値が高いほど、その質問への肯定度が高いことを意味する。

各問ごとの結果については、藤永（1996）を参照していただきたい。これにつき、多変量解析その他の処理を行ったが、今回は単純集計の平均値についての考察とクラスター分析の結果のみを述べる。

まず、全体の４割以上に及ぶ計22項目において、各群間にほとんど差がないことが認められる。同時に、子細にみれば、各群の間にそれらしい違いもまた認められる。

（1）　文化普遍性

前者は、また三つの群に分かれる。　第一は、各群を通して賛成度の極めて高いものであり、「2　自分の親にはできるだけの長生きを望む」「5　子の親への愛着は育てられかたによる」「12　異性愛の本能性の肯定」、「19

夫婦間の愛着と親子間のそれは別物」、「28　自分の子にはできるだけの長生きを望む」、「29　異性愛は理性をも超える」、「38　子どもが親を慕う愛情はうまれつきのもの」、「47　子への愛着は異性愛とは別物」の８項目があげられる。このうち、２、12、19、28についてはイギリス、19は韓国、29は中国の得点がやや低い。しかし、この僅かな例外を除けば、他は全て、４点以上の同意度をえている。これらは、一応かなり文化を超えて普遍性の高い愛着の下位システムをなすといえよう。

特に、我が親、我が子にはできるだけの長生きを望むは、最も普遍的かつ肯定度が高い項目である。イギリスの学生の肯定度は概して低いが、これはEdingbough大学生のもつ知的・冷静・やや懐疑的というスコットランド気質の現れであるのかもしれない。もし、そのような解釈が許されるとすれば、現代の社会生物学者のいう遺伝子伝達への願望は洋の東西を問わず普遍的といえるのかもしれない。興味深いのは、異性愛も生得的かつ理性を迷わせるほど強烈なものとみなされ、同様に普遍的な愛着の一つとなっているが、子の親への愛着は生得的とみられているにもかかわらず、いっぽうでは生後の養育のあり方という環境的な条件によるともみなされている。異性愛は、素直に人間の本性とされているのに対し、親子間の愛情は生得の無条件的といえるほど強いものでもありながら、反面養育のあり方にも依存していると考えられている。いいかえれば、親子間の愛着は、「本性か養育か」という大きな葛藤を含む。さらに、この葛藤は、東アジアの諸国のほうが西欧圏よりも大きいようにみえる。

しかし、親子間の愛着は夫婦間のそれとは別物とみなされている。親子間のそれは、後述するように第一に強いものでもある。このことは、初めに述べた夫婦か親子かという東西の対比が今は似たようなものになりつつあることを示しているのだろうか。一つの問題たるを失わないように思われる。

次に、それほど強くはないが、普遍的に賛同されている項目がある。「９　夫婦間の愛着と配偶者以外への異性愛とは別物」、「15　男性の婚外異性愛」、「32　異性愛の普遍性」、「33　子どもへの愛着は親自身の育てられ方

次第」、「34　子どもは第一に大切」、「36　ひとは皆仲良しグループをつくりたがる」、「39　同性と異性では友情は異なる」、「41　女性の能力は男性と同等」、「43　親の我が子への身体的虐待は理解不能」である。これらでは、回答の尺度値平均は３．５から４．０の範囲にあり、第一群ほどではないがかなり高いといえよう。

ここにみられる傾向も、上と変わらない。異性愛はきわめて強いもの、友情にもどこかに異性の関係が混入する、特に男性では異性愛が強い（興味深いことに、男性の婚外異性愛は男子学生のほうが強く肯定している）等は、異性愛の強さを再び確認するものであり、社会生物学者のいう雄の繁殖戦略を多くの人が暗黙に認めていることを示している。続いて、子どもはなにより大切、また我が子に身体的危害を加えるような行為は理解不能という一種の子宝思想が表れるが、ここでイギリスの学生が珍しく他と同様な強い賛意を示すのが興味を惹く。イギリスでは、近年幼児虐待が多発していると伝えられるがそのためなのか、それとも子宝思想は今や必ずしも東アジアの専売とはいえなくなっていることを示すものだろうか。しかも、子どもに対する親の愛着は、親自身の育てられ方によるという前と同じ生得性と裏腹な一種の葛藤が再び表れている。もう一つ、ダミー項目41の男女の能力の平等性について、親・学生層を問わずかなりの賛成が表明されているのが注目を惹く。

最後の第三群は、回答傾向が中立点より下にあるもの、つまりこぞって反対の意志表示のなされているものである。それらのうち最も目立つのは、「37　異性への愛情は我が子への愛情より強い」であろう。全体を通しての平均得点は２点をやや上回るくらい、つまり余り当てはまらない程度ではあるが（なかではアメリカの反対の強さが目立つ）、一致しての、しかもかなり強い反対意見には無視できないものがある。上で、愛着の二大システムは親子間と異性間のものと述べたが、この二つでは前者に軍配があがることになる。これは、重要な普遍的結論といえよう。もう一つ、「46　子どもが本当にかわいいのは２～３歳まで」に対しては、アメリカを最強として皆反対が強い。

この設問は子どもの本質を無邪気とみるいわゆる童心主義を訊ねたつもりであったが、予期に反して儒教圏諸国の賛成が強いとはいえなかった。

このほかは、得点平均が中立点よりやや下にあるもの、つまり弱い反対が表明されている信念群である。具体的には、「17　子どもが一人だけなら男を望む」、「26　大人はあらゆる点で子どもに勝る」、「42　女性の婚外異性愛」などが属する。17はいうまでもなく、儒教圏諸国にみられる男系・長子相続制への信念を問うものである。予期に反して、東アジアの諸国にこの傾向が強いとはいえなかったのは、ここに今後の探求に値する問題の潜むことを暗示する。「26大人は常に子どもに勝る」、というのは、西欧的発達心理学のもつパラダイムの一つであり、成熟優位説という形で長い伝統をなしてきた（藤永，1995）。しかし、ここでみる限りでは東西諸国で等しく肯定されてはいえないことになった。全てという形容詞が強すぎたという懸念はあるにせよ、多少意外な結果といえる。42の女性の婚外異性愛は、中国男子学生を除いてやや否定的というところである。男性の婚外異性愛とくらべて対照的であるのみならず、興味深いのは男子学生のほうが肯定度がやや高いことである。我が身に引き比べて、そう思うということなのだろうか。つけ加えれば、「31　宗教は人間にとって第一に重要」はダミーの設問だが、どの国でも否定的であった。ただし、韓・米のみは反対の程度が低かった。

（2）　文化固有性

対比的に、各文化に固有と考えられる特徴もまた少数ながら認められるようである。「1　人間関係のあり方は今も昔もほとんど変わりない」はダミーとして作った設問であるが、ここで韓国の親の世代ではきわめて高い肯定の意見がみられる。この質問では、日本と韓国が他の諸国より賛成度が高いのだが、後者は一段高くまた親の世代と学生のそれとの差異が際だっている。韓国は、血族・宗族意識がきわめて強固であり、いまなお祖先の祭祀は一族の最大行事の一つとよくいわれる。筆者の知人のある韓国人研究者は長子であり、このような祭祀に対して全面的責任を負わねばならない立場にある。

彼のいうところでは、今度父親の誕生祝いを大々的にやることになったのだが、そのため親族を何人呼ぶかで頭を悩ましている。最初のリストでは500人を予定していたが、削りに削って半数にしたということであった。韓国の親族は7親等までを数えるという。現代の日本とは比較になる話ではないが、それだけでも驚くべき数字といえよう。韓国中年期の親の世代で特にこのような意見が強いのは、こうした伝統的な親族関係の根強さを身をもって痛感しているためであろうか。

しかし、「4　親族への愛情は友人への愛情よりはるかに強い」は、このような韓国の伝統を考慮して作った設問であるが、意外にも韓国での反応は最も肯定度が低かった。韓国共同研究者の意見では、上のような宗族・血族祭祀にともなう負担を一身に受けているのは今回の調査にみる30代を中心とした若い親の世代であり、また学生層では伝統への反逆の気分も強いのでこのような結果になったのではなかろうかということであった。この問題を全面的に明らかにするためには、より年長の世代での調査もあわせおこなう必要があると思われる。

しかし、「11　祖先崇拝は自然な感情」という設問はいうまでもなく儒教的信念を問うものであり、イギリスの学生からは理解しがたいという疑問がだされたときく。インストラクターはやむを得ず、これは東洋人の作ったものだから何とか答えてほしいと要請してようやく回答を得た。この問いへの反応は、日・韓・中の三国では肯定的、英・米二国では否定的という鮮やかな対比を示した。イギリスの不可解という反応とあわせ考えるとき、儒教的伝統は東アジアの世界でやはり生き残っているといわねばならない。「13　家族への愛情は親友へのそれに優る」、「14　自分の実子への愛着は義理の子へのそれより大きい」は、何れも韓国での反応が最強であるのは儒教的伝統を最もよく残している韓国らしい反応といえる（尤も、韓国では実際上養子はほとんどないという事情を考慮せねばならないが・・・）。同様に、「22　親の子を思う愛情はいつどこでも変わらない」は、日・韓・中で強く肯定され、一方、米・英ではほぼ中立の答しか得られていない。このような親子

間の密着性は、「18　血を分けた子もときにはひどく憎い」という感情となって結果する。「40　どんな相手も親しくなりすぎれば反発を招く」は、米・英では否定されるのに、東アジアでは中立、というのもこのような感情の現れかもしれない。フロイトのいうアンビバレンスは、必ずしも西欧で強く肯定されているとはいえない。むしろ、東アジアでの親子関係こそこの葛藤を最も強く含んでいるといえる。

しかし、当然東アジアも一枚岩ではなく、三国のなかでは中国が最も独自の傾向を示している。「8　自分の親に対しても強い反発を感じるようになるのは自然」に対して、他の四国は弱い賛成が示されるのに、中国のみは反対となっている。「7　兄弟姉妹のあいだには性的欲求は決して起こらない」、「23　自分の親や子には性的欲求は決して起こらない」の二つは、現代の性的虐待問題とも関連するいわゆる近親相姦を扱っている。この二問に中国の反対は最強であり、逆に英国は最も弱い。「44　知的な人間は決して愛情に溺れることはない」に対して、中国のみは賛成し他は反対というのも同様な傾向を示しているといえよう。中国思想の一つの特色は性に対する慎み深さといわれるが（中村，1961）これらはその特色と一致する。イギリスの学生はこれらに対し、多く他と異なる傾向（しかも中国とは反対方向）を示すのと好一対といえよう。ただし、「10　子どもは多いほどよい」、「30　どんな子どももみなかわいい」の二つについて、前者はどの国も否定的だが、中国はなかでも強く否定的、後者もひとり反対という儒教圏らしからぬ反応をも示す。この傾向は、おそらく現在の一人子政策の所産と思われるのだが、なお検討を要する。

逆に、いわゆる西欧圏ではどのような特色がみられるだろうか。「20　父の娘への愛情は息子より強い」、「35　母の息子への愛情は娘より強い」の二問は、いわゆるcross－sexualな親子関係の強さを問うもので、異性愛が親子間の愛情にも入り交じるか否かをみるための設問である。フロイト主義者は、このような特殊愛着を肯定するであろう。どの国でもこの問題への答えは否定的だった。しかし、予期に反し、英・米圏での否定度は最強であった。

これは、興味深い問題を提供するように思われる。その他、「25　どんな愛情も根は一つ」については、イギリスの学生のみ反対というこれまた興味深い結果がみられた。

（3）　クラスター分析

以上、具体的結果についてみたように、アジア圏と西欧圏との差が多少とも明らかにされたように思われるが、世代差という問題も残り、上に述べた個々の設問への回答傾向のみでは全体像はなお明らかとはいえない。そのためには、多変量解析の手法が必要となるが、因子分析の結果は余り明快とはいえなかった。

今回の主な変数は、文化圏・性差・世代差の三つであるが、そのどれが最も有力であるかをみるために、各群の各問への平均値を用いてWARD 法によるクラスター分析をおこなってみた。結果のデンドログラムを次図に示す。

結果は、次のように要約されるであろう。

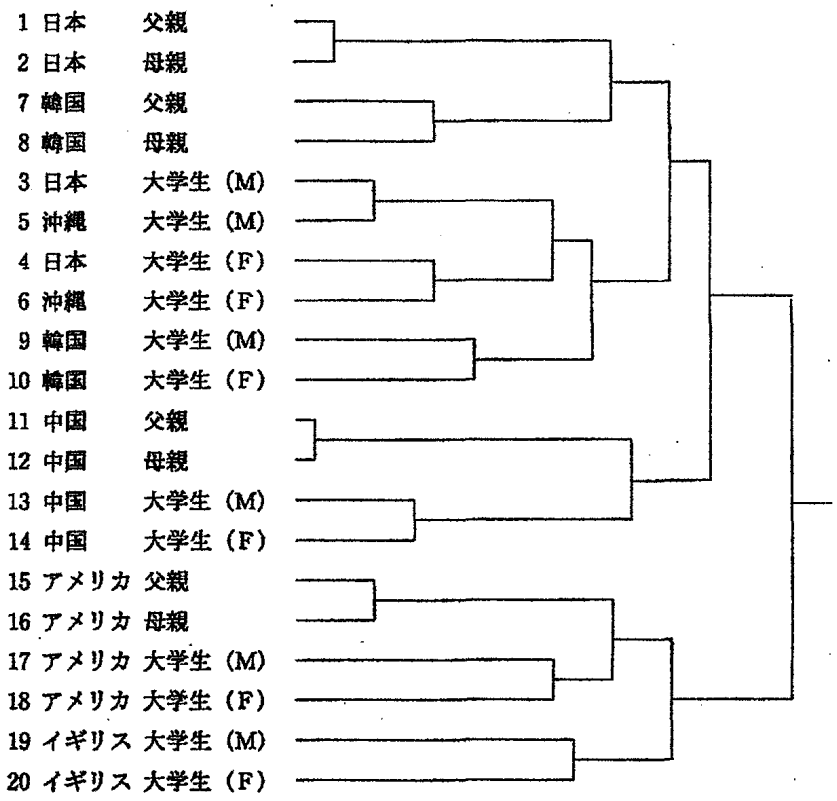

図　20グループの樹形図

1）第一に最も大きな分かれ目は、東アジアと西欧圏の間にあり、ついで、日・韓と中国との間にあり、さらに日本と韓国、イギリスとアメリカの間にある。文化固有性の項に述べた文化圏の差は、クラスター分析ではさらに明確に現れている。特に注目に値するのは日本・韓国の親同士は互いの学生に対するより反応傾向が近いことである。これに対し、現在の中国は、その独特な政治・経済情勢も手伝って日韓とは距離が遠い。儒教文化の影響はなお根強く残ってはいるが、それは社会的変化によって大きな影響をも受ける。

2）第二の大きな境界は、世代差にある。例えば、日本と韓国との父親・母親は、それぞれの大学生よりも相対的に近い。このことは、発達環境のちがいによる社会化のパターンの差違が、対人関係の意識を大きく変えていることを暗示する。

3）さらに、それぞれの文化圏において、父親・母親、男女大学生は常にペアになって現れている。このことは、人間関係についての信念体系の差違を規定する要因として性差は最も小さいことを意味する。

4）沖縄学生の反応は、韓国のそれより本土の学生に近かった。上と同じことになるが、固有の地域文化の影響よりも時代環境のそれがより大きいであろうことが再び示される。日本・韓国のように高度情報化社会へと急速に変貌しつつある諸国では、おそらく時代環境が社会化の主要要因になるであろうことが示唆されている。

5　結論と今後の問題

以上、試案的試みであったが、この質問紙による方法は、今後の比較文化的研究においてかなり有望な用具になる可能性は確かめられたと考えたい。これは、一つの収穫であった。

ただし、当然いくつかの反省も必至である。先に挙げたように、韓国での

結果には意外な部分もあり、より広いサンプルをとる必要が痛感された。世代差はかなり大きいようだということを忘れてはならない。しかしそう考えると、おそらく同一文化圏でも世代によるねじれ現象とこれに絡まる世代・地域相互作用の大きさはかなりのものであろうと予想される。今回は、きわめて限られた地域について調査をしただけであり、解釈の一般化は自ずから限定される。今後、同一文化圏内の下位文化についても比較検討が望まれる。

また、質問にも不足な部分がいくつかあることを事後的に気ずかせられた。例えば、自己愛についての設問は皆無だった。各下位愛着システム間の比較にも欠けているものがあった。性的愛着は生活史によるか・あくまで生得的かという設問が、親子関係との対比において必要だったことも後に気づいた。宗教的な信念に関わる部分があるという点を考慮すれば、例えば超越者についての設問も考慮すべきであった。

さらに、毎度指摘される翻訳の問題がある。字義通りに訳してみても、必ずしも理解されるとは限らない例は、先祖崇拝の項で述べたとおりである。ただし、筆者は翻訳の難しいもの、理解しがたいものは除くべきという常識的主張には必ずしも同意はできない。文化的比較においては、理解可能なものに限ってしまった瞬間に、既に普遍性の次元のみを取り上げるという落とし穴に陥る危険性が大きいと考えるからである。

しかし、以上はテクニカルな問題に過ぎない。筆者がより深層的と考えるのは、21世紀を見据えての国際間の相互理解の問題である。日韓の親同士の反応傾向が近いという結論はおそらく日韓双方の多くの人々を満足させないかもしれない。なお、ここに資料をあげる余地がなかったが、その他の研究を参照すれば、儒教的信念は現在の日本よりは韓国や台湾のほうがより強い傾向も否定できない。総合的にみて、日韓のあいだに小異はあっても、大同のほうがより大きいといったほうが適切であろう。日韓関係が、政治的問題でとかくぎくしゃくしている現在、筆者としては相互の忍耐と何よりも相互理解のより一層の進展を願わずにいられない。日中関係についても、願いは同じである。このような一見非実用的な研究も、そのために多少とも役だ

ってくれることを期待したいのである。

比較文化心理学の領域では、現在西欧とそれ以外の世界との対比として、個人主義対集団主義、また自立対相互依存という対比が濫用といってよいほどよく使われている。筆者は、これが本論文に述べたような儒教的観念といったより深層的次元からでてくることを無視した表層的対立であることに、大きな不満を感じている。便宜の上だけでの対立の措定は、真の相互理解に至る路ではないと思うからである。

確かに、日本的儒教主義は、大きな曲がり角にきていることは否定できない。ＴＶリポーターが典型であるが、見知らぬ人に対して「おとうさん」「おかあさん」などと呼びかけるのは、聴くのも見苦しいという感じを受ける。「うちの大学」「うちの会社」などの表現も、同様であろう。社会言語学者鈴木孝夫氏（1973）の指摘するとおり、このような呼びかけ法は、明らかに家族内呼称法の変形または拡張である。「うちの大学」も、公的組織を家族的なものになぞらえる以外に適切な理解の方法のないことを物語っている。このような社会についての母型しかもっていないことは、ひたすら近代化を叫ぶ日本の社会にとって一つの不幸であった。おそらく。今後の韓国社会においても同じ問題が降りかかるのは避けられないように思われる。

総じて、資本主義的大規模産業化の時代にあっては、都市化と人口集中は避けられず、無縁な人々の集まりを組織化し能力主義を鼓吹するために、一種の個人主義化もまた避けられなかった。しかし、このような個人主義とヨーロッパやアメリカにみられる伝統的個人主義とは文化的に異なるものではなかったか。全てを一くくりにするのは、短絡に過ぎよう。その意味ではまた、個人主義を無条件に近代化とする一部の論調にも、文化的伝統に配慮しない社会ダーウィニズム――単純進化論としての不安を感じさせられる。

さらには、その個人主義にも一つの行き詰まりと曲がり角が到来しているという指摘もある（ベラー，1991）。近年アメリカでのベストセラーとして騒がれているEQ説も、個々人に固有とする能力主義の否定から出発しているようである（ゴールドマン，1996）。こうみてくると、東西何れも世紀末

の不安に喘いでいるように感じられてならない。比較文化的研究の究極目標は、単なるデータの収集や理論化に止まるものではなく、明日への何らかの指針へとつながるものでなければならないと、筆者は信じている。日本の子どものより均衡のとれた望ましい社会化を考えさせる一助ともなれば、本研究にとって望外の幸せである。

付記　本研究は平成５年～７年の３年間にわたり、文部省科学研究費国際学術研究の助成を受けた。本稿は、その報告「日韓乳幼児における母子相互作用の研究」に筆者が執筆した一章「愛着システムの文化間比較」に、１・２・５節を書き足し、さらに沖縄調査の資料と考察を加えて全体を大幅に改稿したものである。調査の実施には、成均館大学校　李昌雨教授、華東師範大學　劉金花教授、ミシガン大學　秋山道彦教授、エジンバラ大學　D.WRIGHT教授、大阪学院大学　荘厳舜哉教授、琉球大学　嘉数朝子助教授各氏の全面的ご協力をえた。筆者の国際基督教大學調査に際して貴重な資料を提供してくださった学生諸君ともども、記して心からの謝意を表する。

引用文献

Ainsworth, M. D. S.. Blehar, M. C., & Wall,S. 1978 *Patterns of Attachment: A psychological study of strange situation.* Hilsdale, NJ: Erlbaum.

アリエス、杉山光信・杉山恵美子（訳）1980　「＜子供＞の誕生」　みすず書房

ベラー、島薗進・中村圭志（訳）　1991　「心の習慣」　みすず書房

Bowlby, John. 1951 *Maternal Care and Mental Health.* Geneva: WHO

土居健郎　1971　甘えの構造　弘文堂

エリクソン　仁科弥生（訳）1980　「幼児期と社会　１・２」　みすず書房

フロイト　懸田克身・高橋義孝（訳）1969　「性欲論・症例研究」　人文書院

藤永　保　1995　「発達環境学へのいざない」　新曜社

藤永　保（編）1996　「日韓乳幼児における母子相互作用の比較文化的研究」　国際基督教大学

Fujinaga T., Rhee C.W., Naito T., & Akiyama M. 1996 *Cross-Cultural Comparisons of Human Attachment Systems among Five Asian and Western Countries.* Paper presented at XIVth Biennial Meetings of ISSBD

ゴールマン　土屋京子（訳）1996　「EQ　こころの知能指数」　講談社

ハーロウ　浜田寿美男（訳）1978　「愛のなりたち」　ミネルヴァ書房

加地伸行　1994　「沈黙の宗教　儒教」　筑摩書房

北山秋男（編）1994　「子どもの性的虐待」　大修館書店

久保田まり　1995　「アタッチメントの研究」　川島書店

Leonard, Peter. 1984 *Personality and Ideology.* London: Macmillan.

中村　元　1961　「東洋人の思惟方法 2 シナ人の思惟方法」　春秋社

小此木啓吾（編）1979　「精神分析・フロイト以後」　現代のエスプリ148　至文堂

小野けい子　1992　人格形成の基礎と課題　藤永保（編）「現代の発達心理学」　193－204　有斐閣

スピッツ　古賀行義（訳）1965　「母－子関係の成りたち」　同文書院

鈴木孝夫　1973　「ことばと文化」　岩波新書

テア　吉田利子（訳）　1995　「記憶を消す子供たち」　草思社

李御寧　1982　「「縮み」志向の日本人」　学生社

山住正巳・中江和恵（編・注）1976　「子育ての書　1・2・3」　平凡社

A Comparative Study of Human Attachment Systems among Five Asian and Western Countries (English Résumé)

Tamotsu Fujinaga

This study aims at cross–cultural comparisons of human attachment systems using a newly devised questionnaire. The term attachment in developmental psychology usually means close relations between the mother and child, but more generally it can be applied to all interpersonal relations, for example, between the father and child, husband and wife, among family members, close relatives, peers, friends and especially lovers etc..

Harry Harlow (1971) argues that macaques have five sorts of affectionate ties, for example, a mother monkey's affection to her offsprings, the baby monkeys' affection to their mothers etc., and these ties are hierarchically constructed and epigenetically developed. His idea is very interesting. In human beings, cross–sexual relations or parent–child relations are so universal because they can be highly determined by biological factors. We undoubtedly also have some types of affectionate ties similar to macaques. However, the importance of relations such as blood relations is probably determined by cultural factors.

Confucian Ethics(Jyukyou), using this term I mean here the ethnic religious beliefs of the East Asian people, originating from China. Its central belief is the idea that preservation of one's own family line is the most important matter in his/her whole life. Consequently and naturally, close harmony and union among blood relatives and family members becomes a genuine source of human morality in Confucian ethics. The morality of filial duty becomes the highest vir-

tue, and the more general moralities are derived from this matrix. For example, the ruler or the authority is regarded as the understudy of the parents and should be a target of one of the higher virtues, a virtue being dutyful to such persons with the same attitude as to one's own parents. In a word, each individual's identity, loyality, security, pride and morality have common roots in such a system of family in Confucian ethics. Only children are the keys to preserve his/her family line and blood relatives, so it is natural that they should become the most important treasure in any family. This belief can easily lead to secure attachment between parents and children.

However, in Confucian ethics, only male children can preserve their family line, so sons are held in more respect than daughters. Accordingly, in East Asian countries, it is possible that mother–son relations are more worthy than mother–daughter relations. Also, blood relations may have higher value than in the Western world.

Human affectionate ties may have far more varied and complex hierarchical structures than in the case of macaques. I call these ties as a whole human attachment systems. Knowlege on human attachment systems of an individual culture may give us an important key context to interpret various cross–cultural studies of mother–child interaction. So I tried to construct a new questionnaire to understand the human attachment systems in a comparative research between Japan and Korea, I have led for the latest four years.

Method: The aim of this questionnaire is to determine a complex hierarchical structure by comparison of relative values of each attachment in a particular culture. One of the concrete examples of this questionnaire which aimed to compare the strength of attachment between blood relatives and friends is question no.4,"Love for relatives is much greater than love for friends". Thus, a new questionnaire consisting of a total of 48 questions, 38 such questions plus 10 dummy or relational questions, was constructed.

As the subjects of this questionnaire survey, fathers and mothers of kindergarteners and male and female university students were chosen from five different countries, three East Asian, Japan, Korea and China and two Western, the United States and the Great Britain. However, in Britain, I could not get the subjects of fathers and mothers of kindergartners. Moreover, I chose Okinawan university students, because Okinawan culture directly influenced by Confucian ethics from China. This historical condition of Okinawan culture was similar to the Korean one and in contrast with most of the other subcultures in Japan, which accepted Confucian ethics through Korean mediation. So, total subjects consisted of 20 groups.

Results: The results of this questionnaire survey, put simply, lead to the following five conclusions;

First, there were so many questions unexpectedly showing almost the same answering tendencies. Seventeen questions got coincidental agreement and five got disagreement throughout almost all 20 groups. This means that there is a remarkable cultural universality of attachment systems among these five countries.

Secondly, the above main coincidences were divided into two categories. One was about parent–chid attachment and the other is about cross–sexual love. Both attachments are similarly so intense that they were regarded as innate or instinctive. However, question no.37, "Love for members of the opposite sex is stronger than love for one's own child" was commonly denied, so in these two categories the former is stronger than the latter. Moreover, question no.5, "A child's attachment to his/her parents can be formed by the way the parents raise the child" received common and strong agreement. The parent–child attachment seems to hold in itself a sort of conflict, 'nature or nurture,' and this conflict is stronger in Asian countries than in Western ones. In this way, these two belong to very different categories of attachment.

Thirdly,some cultural specificities were also recognized. One of the typlcal questions showing such attitude was no.11,"It is natural to worship one's ancestors". To this question, Asian subjects' responses were all positive but Western ones' were all negative. This contrast is very impressive. It hardly needs to say that such an attitude represents one of the beliefs of Confucian ethics that preservation of each family line is the most important matter. These attitudes also represent some other aspects of the same Confucian ethics.

Then, where are the boundaries between different cultures? That is the fourth problem. To answer this question, I did a cluster analysis by Ward's method using the mean scores of the 20 groups, calculated according to the 5 points answering scales of the questionnaire.

The results of the cluster analysis are shown as a dendrogram (cf. Figure). Looking at the Figure, locations of the first-order boundaries are quite obvious. The first one naturally exists between Asian and Western countries. And the second exists between China and Korea-Japan groups and also between the United States and Britain. Though commonly having the same Confucian ethics, modern China has particular political, economical and social systems and its Confucian beliefs seem to be relatively changing. For example, to the question no.10, "The more children you have the better" though all groups indicated their disagreements, the Chinese one is the strongest. This finding suggests one of the influences of the 'one child policy' of modern China and it undoubtedly makes the distance of the attachment-beliefs between China and Korea or Japan farther apart. A similar boundary also exists between the United States and Britain.

The second-order boundaries are recognized between the generations of parents versus students in each country. Because fathers and mothers or male and female students in each country always form a pair without exception, the gender difference of the attachment-beliefs is minimal compared with cultural or generational differences. As for Korea and Japan, the distance between both

parent groups is closer than that between both parent and both student groups. It can be concluded that the attachment–beliefs of Korean and Japanese people are very alike to each other.

The fifth conclusion is closely related to the fourth finding. As described above, Okinawan and Korean cultures have a similar historical condition, however, the distance between Japanese and Japanese Okinawan students is closer than that between Japanese students as a whole and Korean students. Human attachment–beliefs may be more strongly influenced by contemporary mass cultures than by historical–cultural conditions in such a societies as Japan or Korea which are drastically changng into highly technological information societies.